

開催地名	秋田県秋田市
開催日時	令和6年2月3日（土） 13:30～15:00
開催場所	秋田市北部市民サービスセンター
語り部	山田 修生（宮城県仙台市）
参加者	防災安全対策課職員、秋田市内自主防災組織、町内会等 64 組織 85 名
開催経緯	全国各地で災害が激甚化・頻発化しており、防災に対する関心は高まっているが具体的にどのような活動をするべきか悩みを抱えている自主防災組織が多い。また、高齢化などの理由で自主防災組織の結成に消極的な地域があることから、今回語り部による講演会を開催し、防災意識を向上するだけでなく今後の防災活動について考えるきっかけとしたい。
内容	<p>（1） 東日本大震災の実体験</p> <p>東日本大震災に匹敵するといわれる大地震と津波被害が東北地方で 869 年（貞観 11）にもあり、およそ 1000 年に一度の災害といわれている。前震が 2011 年 3 月 9 日、3 月 11 日の本震に加え、大きな余震が 2011 年 4 月 7 日におこった。1983 年（昭和 58 年）秋田県沖での日本海中部地震の際にも余震が本震の約 1 か月後に起きている。大地震の後の大きな余震は被害が大きくなることが多く、注意が必要である。能登半島の大地震も本震から約 1 か月経過し、大変心配である。</p> <p>東日本大震災時のマグニチュード 9 というのは、身動きが取れないほどの揺れに加え、得体のしれない大きな音がする。それが何度もおこり、家族に声をかけて安否を確認することしかできず、防災士である自分もそのときは何もできなかった。</p> <p>まずは自分と家族を守ることが第一である。実際に大災害がおこると、すぐに要支援者などの世話をしたりすることは難しい。指定避難所までたどり着けないことも多く、近隣など小単位で、集会所やお寺など身近な場所へ避難ができるよう準備が必要である。</p> <p>地下配管から地上への噴出の被害も大きく、仙台市では水道が使えない人が一時 98 万人にもものぼり、全国から支援していただいた。水道管の耐久年数が迫っているものも多く、早急に対策が必要である。マンション、アパートでは屋上のタンクの落下や家庭の電気温水器が倒れて使えなくなったり、電線の垂れ下がりによる感電の恐れがあったり、多岐にわたる被害があった。</p> <p>（2）津波対応</p> <p>東日本大震災の際は、第一報は津波注意報だったため非難する人は少なかった。それが第二報では津波警報になり、第三報で大津波警報になり、被害が大きかった一因となった。津波からの避難は一瞬を争い、特に日本海は遠浅で津波の到達が早いことが予想されるため、自分の住んでいる地域で津波があった場合は、どこへ逃げるか事前に調べておくかなければならない。近くに山などが無い場合は、近隣のマンションや鉄筋コンクリートの建物の 3 階以上に避難（垂直避難）させてもらえるよう、連携も必要である。避難所に指定されている学校などにも津波は来ることがあり、みんなで避難所からの移</p>

動をしなければならないこともある。防災ハザードマップを再度確認していただきたい。

地震は、揺れも津波も毎回違うことを想定しなければならない。建築方法になんら問題のなかった新築の家が、土台（基礎）ごと80メートル流されてしまうほどの力が津波にはある。仙台市では沿岸部に津波避難タワーを作り、備蓄をして300人ほどが避難できるようになっている。仙台市以外にもこういった避難ビル・タワーを作る動きが全国的に増えてきている。また仙台市では、避難所や津波避難ビルまで行けない場合に備え、高速道路脇にも避難場所を設けている。

（3）自主防災活動

災害はいつおこるかわからず、東日本大震災の時のように男性が家にいない時間帯に起こることも多く、女性中心の防災訓練が重要である。秋田市の女性の防災リーダーは53人中7人（令和5年度）であり、自主防災会の充実をはかるためにも、今後の女性の参加が求められている。

要援護者や高齢者の対応、一人暮らし宅の訪問などをし、また罹災証明の取得が大切であるとの周知や、罹災証明の発行などを進めていかなければならない。

被災者生活再建意向調査員として、応急仮設住宅やみなし仮設住宅などを訪問してきた経験からいうと、寄りそって傾聴ができる年配の人材は大いに助けになる。

町内会長が持っている要支援者の名簿などを防災会責任者も共有することが重要で、外国人対応などもあり、地域の多言語のできる方などを育成することも必要となる。

今回伝えたいことは、女性の防災リーダーをもっと増やし、女性だけの防災訓練を行うことと、可能であれば、1部屋を家族の集合場所にできるよう、物を置かない部屋もしくは腰の高さよりも高いところに物を置かない「自宅避難場所」を作ることを勧めたい。屋外へ避難をするように指導されることもあるが、屋外は落下物などの危険を伴うため、個人的には「自宅避難場所」を作っておくことが重要だと考える。



開催地より

語り部の講話から地震・津波災害の怖さを改めて感じる事ができ、まずは自助が大切であるということ再認識した。本市としても、昨年豪雨災害に見舞われたほか、日本海中部地震から40年が経ち防災意識が高まっていることもあるため、参加できなかった組織等に内容を共有していきたい。女性参画による防災訓練の実施などは、重点を置く必要があると感じるため、今後の防災活動に取り入れていきたいと思う。